

「ぼくの名前は名島橋」
福岡市立名島小学校 5年 大谷 伸ノ輔

ぼくは、昭和8年3月に生まれた。そのころの日本は、戦争が始まりそうな暗いふんいきだった。そこで町を元気づけ、人々に希望を持たせる為に、ぼくが作られる事になった。

ぼくのお父さんの名前は、後藤龍雄さん。お父さんはかわった事をする人で、ぼくを作る時でも、当時ではめずらしい、鉄筋コンクリートのアーチ橋の作り方で、『百年後にも通用する型やぶりの大きさで、強くてりっぱな夢の石橋』を作ろうとしていた。お父さんの仕事仲間も、その夢に共感して、たくさんの人たちの熱い気持ちがぼくの体のあちこちにこめられている。



2年3ヶ月をかけて生まれたぼくは、そのころは、それほど車が通るわけでもなく、子どもの遊ぶ広場のようになっていた。ぼくのあまりの大きさに、その目的が戦争になった時に戦車でもわたれるようにとか、飛行機のかっ走路の代わりに利用できる様にとか、いろんな話がうわさされたそうだけど、本当のところはなぜなんだ。ただ言える事は、白く大きく輝くぼくの存在が、みんなの明るい希望の象徴であった事だ。その後戦争が始まり、あちこちで空しゅうがあった。白く目立っていたぼくは、爆弾を落されないよう、体中コールトールで黒くぬられ、照明灯もはずされた。かなしかったけど、ぼくはみんなのおかげで空しゅうからまぬがれることができた。



そして、平成6年の、60才の誕生日には、かん暦祝として改めて注目される事になった。少し弱った体を修理しておしゃれな照明灯をつけてもらった。赤いちゃんちゃんこだって着たよ。それ以後、毎年イベントで祝ってくれたり、いつもぼくをていねいに清そうしてくれる商工会の人たちやきれいな花でかざってくれる地域のボランティアの人たちがいる。

ぼくが今、福岡の東玄関のシンボルとして本州と九州を結び、産業、文化の発てんの手助けができるのも、こうした人たちに支えられ、守られてきたおかげだ。そして、70年前にぼくを作ったお父さんや大工さんたちの夢だった『百年でも通用する橋』にむかって、ぼくはしっかりと自分の役わりをこれからも果たしていきたいと思っている。

最後に、毎年12月に行なわれる福岡国際マラソンの時には、ぼくの上をたくさんのランナーが走りぬけていくので、ぼくのすがたも、ちょっとは見てほしいな。